

Mary Barton とヴィクトリア朝メロドラマ

D.ブーシコーによる翻案劇('66)などを中心に

井出 弘之

1

メアリーが棧橋を離れた ジョン・クロッパー号 を追おうと焦るが、頼りの少年チャーリーが見えない。でも母親は言う、「あいつぁ大丈夫。それ椿事だ、火事・暴動・怪しげな密談だとくりゃ、もう捜し回ることぁないよ」(27章)。事実当時の演劇界ではセンセーショナルな火事・殺人・暴動・重婚という非日常的な不測の出来事は必須の呼び物であった。だから血の騒ぐことに目のないこの少年は、リヴァプールの芝居小屋の上得意客であった筈だが、テキストはそんなことには何ら触れていない。

もう一つ、巡回裁判から帰宅したメアリーを、お節介者サリーがさっそく掴まえ「証人台に立ったご気分は？」と訊き、慰め言をかける、「恋人同士の果たし合いなんてお芝居ではしょっ中...そう舞台じゃ決まって手元に剣をひそませて、ネ！」(34章)。つまり、ここでは舞台芸術がカリカチュア化されている。

しかし、だからこの作家 Mrs.Gaskell は畢竟メロドラマとは無縁であったか、というところではない。因みに1852年、彼女はディケンズ夫妻に誘われ、D.ブーシコーらの笑劇 *Used Up* (初演'44年) のアマ公演を市内で楽しんだ記録がある。また翌年、同時爆発的にイギリス各地でも無数の客を動員した社会メロドラマ *Uncle Tom's Cabin* (Aiken 脚本は'52年) の原作者 Mrs.Stowe (1歳年下) とは親友の仲、「私の次の新作はミセス・ストウの本を出しているひどい出版社からよ」と巫山戯たり('59年)もしている。

いや、メロドラマ的要素は、実はギヤスケル文学にもふんだんにあった。*Mary Barton* ('48年) の初っ端には「謎の失踪」、ついで工場炎上、スト中の共同謀議、殺人事件、誤認逮捕、裁判、盲いた女性歌手の開眼...といった具合。ただギヤスケルは「普通の人、日常の暮らしを甘受する姿勢から、過度の感傷とセ

1

ンセーションナリズムは極力避けた」(K. Tillotson)という一句は胆に命じておかねばならないにせよ。だとは言え、危険極まる火事現場でのジェム父子の「梯子渡り」(5章)、ウィルが語るマン島の尾のない猫は「綱渡り名人」(13章)、無罪評決を喜ぶチャーリーの「逆立歩き」(32章)といった嬉しいパフォーマンスの数々、またロンドンから来た組合代表は「大根役者」(16章)、警官B72がジェムの母親に「その男は変装した刑事かも！」(19章)、当のメアリーさえ気丈にも「人前で猫被り取繕うこともできそうな気がして」(24章)...といったtheatricalな措辞、レトリック抜きでは、この小説は淋しくなってしまう。

ギヤスケルのメロドラマ的要素を炙り出すのに格好の材料、それはヴィクトリア朝中期最高のメロドラマティスト、D.Boucicault ('20 ~ '90 アイルランド生れ、国籍は英・米)の *The Long Strike* (『長期ストライキ』Lyceum, 15 Sep. '66)である。以下なぜ18年も後に、劇場がウェストエンドでなくてはならなかったのかを検証。ついで所謂「工場メロドラマ」の前史を顧みた上で、『長期ストライキ』を原作小説と比較、原作の思わぬ美質にも言及したい。

*

さて、なぜ'66年に?という問題だが、作家死没翌年で著作権問題も荷が軽く、話題性もある、というだけではなかった。原作背景にあったチャーチスト運動('30s ~ '40s)は下火になりつつあったが、大陸の二月革命などに煽られ'66年7月、'48年の騒ぎに並ぶ流血のハイド・パーク大集会を惹起。この戯曲上演初日はその2ヶ月後だったのだ。

第2、アイリッシュとの関係　そもそもダブリン生れのブーシコーが原作中の「アイリッシュ」の文字を見落す筈がない。エスターの元「かれ」の去った先は「アイルランドの駐屯地」(14章)、宿命の宵ジョンが送り届ける路上の迷子の母親から返されるのは「Irish blessing」(17章)。片や劇作家ブーシコーは役者として自ら舞台上でJohnny (=Will)役を演じたが、それは「Irish sailor」。申すまでもなく彼の、'60年代「センセーション」劇の嚆矢とも称すべき出世作 *The Colleen Bawn*(初演'60, NY)は、英国系 Irish の「近代」と伝統的 Irish との葛藤を描くメロドラマだった。再び'66年に眼を戻すと、前年のアメリカ南北戦争終結に勢いを得て、時あたかもイギリスでもフェニアン団が蜂起し始めていた。

‘ Manchester Martyrs ’ の公開処刑は翌’67年の出来事だ。

第3に、劇作家が Noah (=John Barton) を発砲射殺事件以降完全な狂人にしてしまう ‘ 改変 ’ について。ブーシコーは原作のメアリー錯乱、阿片癖ゆえのジョンの狂気、に深く心惹かれたに違いない。なにしろ ‘ heart ’ のミステリーこそは センセーション・ドラマ の、誕生以来の最重要なトポス。そうした文化風土がもたらしたむしろ豊かな結実なのだ。それにしても原作以上に ‘ 心神喪失者 ’ の刑事免責が露わにされた背景には、’62年の Lunacy Act 改正などが絡んでいる。

第4。このジャンルの生命線 センセーション・シーン で息を呑む観客、彼らのためにブーシコーが案出した新機軸について。原作の遠路行 (章5つ分) に代え、新時代の驚異 = 電信でジョニーを呼び戻す...かれの得意芸とはいえ、鬼才ぶりは語り草となった。長篇のストーリーを2時間半以内に圧縮する、という条件がこの時短 (笑) により見事クリアできたのも、文明の利器のお蔭 Telegraph Act は’63年、また劇中局員はシカゴとも交信するが、大西洋接続ケーブルは’66年開通という、タイミングの良さ! 因みに『パンチ』の副主筆 F.C.Burnand (マンチェスター生れ) はこれをテーマに、パーレスク『これぞ超新版 ‘ 色白の娘 ’』を1ヶ月後に上演した!

以上、都合4点チェックしてきたが、もう1点だけ。この劇作家とマンチェスターはどんな糸で繋がっていたのだろう。やがて世界一とも謳われる名優 H.アーヴィングを世に送り出したのも彼であるが、当時この工業都市に居合わせて、出会いは《ロイヤル座》での『色白の娘』再演 (’64年) 時。名演技 (せむしの ‘ クーリガン ’ 役) に見惚れた彼は、さっそく唾をつけ、逸材を新作りハーサル公演 (市内《プリンス座》) に起用し、花のロンドン・デヴュを約束。ところが折から劇作家に、時代の最先端をいくウェストエンドの《ライシールド座》経営者 C.Fechter (フランス人) から、またとない好条件の仕事依頼が舞い込む.....これが『長期スト』脚本誕生秘話の発端だ。有難いことにフェクターの友人で、ギヤスケルを世に出した C.ディケンズがこの ‘ センセーション・ドラマ ’ 上演に至るまでの助言役を買って出た。序でながら好評で1ヶ月の続演、アメリカで6週後に再演200回、3年後《アデルフィ》で再演される。

たったひと月で、ヒロイン役の女優 (妻) と共に舞台を下りるとは? と首傾げ

たくなる話だが、理由は至極簡単。先のアーヴィング主演 *Hunted Down* (マンチェスターでの‘新作’を改題)の動かせぬ予定が入っていた。つまり翌月にその開幕を控え、備える必要からであった。

2

小説 *Mary Barton* の背景に、英米の社会問題をテーマにした小説群、中でも Frances Trollope や、Tonna (Charlott Elizabeth)、また Martineau、C.Brontë から女性作家によって書かれた factory novel の系譜があったことは、よく知られている。

しかしメロドラマ界にも factory play と呼ばれるかなり重要な分野があったことは、存外知られていない。顧みればヴィクトリア朝歌舞伎とでも称すべきこの大衆演劇のモードは、ゴシック劇から‘海洋物’、さらに‘domestic’へと変貌を遂げてきた。後者二つの接点に位置した典型例が D.Jerrold, *Black-Ey'd Susan* (29年)。そして‘domestic melodrama’の物語背景が当初の‘rural’から‘urban’へと様変わり。この主流の一角で’30~’40年代に膨らんできたのが工場メロドラマ 「初めて都市労働者階級の生活、階級闘争の熾烈さをシリアスに、かつ共感をもって扱い、法の不正義と社会的抑圧への沈黙の抗議のトーン烈しい」大衆演劇 (M.Booth)であった。‘factory’なのに‘domestic’?と訝る向きもある。しかしメロドラマの本領、真骨頂は、元来「社会的な事柄の一切を単に社会現象としてでなく、私的個人のレベルで、勇気・葛藤・弱さ・罪意識にてらし表現すること」にあったのだ。

そこで、読みつがれ演劇史に名を残す工場メロドラマの代表作2篇を瞥見し、『長期ストライキ』に至る道筋を辿っておこう。まずは John Walker, *The Factory Lad* (Surrey, '32) 時あたかも第1次選挙法改正直後、かの『黒い瞳のスーザン』と同じテムズ河南の劇場で1週間上演された。舞台はマンチェスター郊外。貴族気取りの三代目工場主が「今は栄ある科学の時代、俺にも権利はある」と蒸気織機を導入、理不尽にも貧しい工員たちを即時解雇。見棄てられた彼らを流れ者 Rushton が煽動、皆で動力機械を毀し火を放つ。家族抱える心優しい Allen が妻の制止を振切ってまで先頭に立つのは...イデオロギーゆえではない。救貧院の重労働を初め国内外の諸制度に踏み躪られてきた‘流れ者’に共鳴した

からだ。最終法廷の場でラシュトンが治安判事の旧悪（貧救院用の食糧横領）を暴く。が返ってくるのは手垢に塗れた厳しいクリシェ「法は富める者にも貧しき者にも分け隔てなく」...その場で‘流れ者’が工場主を射殺、控えていた軍隊の銃口が一斉に被告たちを狙う！ この幕切れのタブローの余韻は観客のデラシネの魂を震撼させたことだろう。半狂乱のアレン、妻ジェイン、ラシュトンが見る幻影、白日夢は彼らの意識下、心の傷痕を観衆に訴えかけて印象深い。がこれはジェロルド以来の仕掛けで、先々も継承されてゆく地下水脈。つまり社会派劇でありながら、これは単なる‘プロレタリア演劇’ではなかったのだ。

忘れずに一言 この戯曲にはネタがあった。実は同年刊のマーティノー『政治経済学物語集』（‘The Manchester Strike’を含む）がそれ。とは言え上の戯曲には、ネタ本と異なり「市場経済に伴う難題の独自の解決策」など示唆されてはいない。なのに舞台＝客席が一つになり得たのは、それが「犯罪と抗議をない混ぜにした、鬱屈した心情の自然な表現」であればこそ（S.Vernon）であった。因みにマーティノーの後の‘背教の書’（’51年）に、ユニテリアン派同士で長く交友のあったギヤスケル、C.ブロンテが大衝撃を受けた話は有名だが、ことほど左様に先走りすぎていた彼女の世界を、ウォーカーは劇作家の手法で大衆演劇界に状況劇として取り戻した、とも言える。

さて第2の金字塔は、4年後の G.F.Taylor, *The Factory Strike* (Victoria 座、’36年) 1ヶ月続演で、’38年にリバイバル。舞台はマンチェスター寄りのヨーク州。こちらは動力化をやせ我慢してきた雅量ある老工場主 Ashfield がやむなく賃金カット。「奴隷と同じ、ストだ」と血気に逸るダンディな織工 Harris と、主人公 Warner（経営者の衷心と飢えた家族を想い、追従できない）が激しく対立する。その夜工場は焼け落ち、工場主は射殺。...3年後、食いつめて今や野盗団と化した彼らの前に Ashfield, jr. がスペインから戦勝帰国するが、彼もまた Harris に殺害され、無実の罪が Warner に着せられる。獄中、死刑執行寸前に容疑は晴れ、めでたく幕。

「政治テーマは無益と心得ておりますので、平に検閲はご容赦を！」と、これは当上演劇場主の政府委員会に対する答弁の辞。げんに作中の工場主の肩をもつヒーローの、愛し子を前にした涙ながらの処刑前最期の言葉も「この悲しみの元凶は、この国に巨人のごと立ち上がり労働者階級間で半神さながら昨今崇められ

ている そう、ストライキだ！」(III-vi)。いかにも、このドラマ全体の動因は、今や明らかに「社会構造と労働者の団結というより、人間的でパーソナルな恨みや憎しみ」(R.W.Schoch)なのだ。実際悪党 Harris は、社会正義面して実は私恨の塊：「仲間が...幼馴染みが、俺の眼つけた娘 (=Jane) を奪いやがって！」それだけではない。G.F.テイラーは政治社会的言説の装いと同時に「義理人情の底流、rollicking humour をもち、表向きメッセージを覆そうとしている」という S.Vernon の評言はけだし至言である。ここには確かに、Walker 脚本には欠落していたコミック・レリーフ役(とくに居酒屋亭主 Tim や Lucy)あり。またメロドラマ特有の「情動的でテーマ性を帯びた、心の闇を映し出す心象風景」(M.ブース)にも事欠かない。となると、ギャスケル&ブーシコーの世界にもいよいよ近い。

*

ここまで *Mary Barton* 戯曲化の前史を辿ってきて、ブーシコー翻案にはすでに先達がいいて、そのスクリプトに当局の厳しい検閲の朱が入ったという、忘れられた秘話に行き当たる。今の *Factory Strike* の上演劇場《Victoria 座》(通称‘血の桶’)から50年に、『メアリー・バートン』の最も早い翻案台本が宮内大臣に宛て提出されていたのだ。従来、目付役の基本姿勢は「非道徳は関知せぬが、政治的言及は避けるべし。すべからく家庭的で人のハートに響くものを」(Bulwar-Lytton, '32)といった程度だった。だが43年の‘劇場規制条例’により、マイナーな場末の劇場にも検閲の目が入りだす。新時代の輿論が幅をきかせ始めたのだ。

この翻案台本の場合、検閲官 W.B.Donne が目を光らせたのは表向きただ一点、(革命のような)「社会転覆の恐れの有無」であったのに現実は……。劇作家の名前は伝わっていない。がその台本は Job Legh や Alice の懐旧譚など前半の逸話をカット、バートン父娘、ジェム、カーソン父子の物語に劇的集中をはかったもの(この基本方針はブーシコー脚本と殆ど同じだった)。代りに力点を置いたのは次の2シーン、(1)ジョンが請願拒否の失望に併せてダヴンボートの悲惨を語り聞かせる場面(原作9章)、(2)例のスト破りの話から共同謀議まで(16章)であった。で結果は：「娼婦」「国会」「街頭デモ」「血の涙を流しているのに」「工場主らを襲え！」のフレーズは悉く赤ペンで×印。また(2)共謀シーンは全削除。

さらに検閲官が再提出台本のために示した「襲え！」の代替案は、「困り者は対立感情に油をそそぐやつ[=Harry]だ！せっかくの好い関係を殊更に……」

つまり、所詮「国家は教師じゃない、parent」とそら嘯く検閲官、客層中の新興中産階級の顔色を窮う劇場主（この劇場の謳い文句は全階層向け）を前にしては、手も足も出ずじまい。さぞや、肩を落として脚本家は諦めたことだろう。従って、次にこの小説の翻案が舞台にかかったのは（*Mary Barton; or the Weaver's Distress*, '61）、イーストエンドの小屋《Grecian》だった！それを、ブーシコーがウェストエンドの劇場で成功させたのだ。

3

とりあえず、『長期ストライキ』のあら筋を記しておこう

【第1幕】(i)長期スト中の労使交渉[工場主 Readley(=Harry Carson)vs 職工代表 Noah(=John Barton)]が決裂。(ii)ノアの娘 Jane(=Mary)をつけ狙う Readley vs 幼馴染み Jem が衝突。(iii)職工らがノア宅で‘スト中央基金’の手当を配分。そこへ戻った代表団が「レッドリーの工場襲撃だ！」と怪気炎。ジェムは正式にジェインに求婚、が「友達のままで」に絶望！折しも暴徒に追われ、工場主が助け求めて逃げ込む…二人は階上に匿うが、それが裏目に代表団の謀議「マンチェスター中の工場を毎夜一つずつ焼き討ちだ！」が盗聴された。**【第2幕】**(i)ジョニー来て「親友ジェムが大変だ、ぼくは退く、船に戻るよ」。かつ自殺の恐れありと親友の拳銃を託す。巡回警官が「他の代表団は謀議密告により逮捕、ズラカレよ」…ノアは机上の拳銃に充填！(ii)ジェムは街頭「獄を壊せ、同志を救え」と逸る皆を宥め、リヴァプール手前まで見送りにジェインが工場主と手を切りに向う。後をつけるノア！(iii)わびる娘に「親父を見逃した貸し返せ」と迫るレッドリー、銃声一発！**【第3幕】**(i)現場検証。(ii)長期ストは終息。ノア狂乱！帰着したジェムに状況証拠から手錠！(iii)娘はジェムのアリバイ立証を弁護士に哀訴。がすでに船は出航後、電報局へ！**【第4幕】**(i)奇跡的にマージョつながら、(ii)電文見て水夫は船窓から、波間へ。(iii)法廷では審議は終り危機一髪、ジョニー間に合い‘Not Guilty’（幕）。

さて、原作の多様な人間群像を縮小し、工場メロドラマの定石どおり労使交渉の場（16章）は冒頭に繰り上げることで、これがブーシコー脚本の戦略の

第一。第二はプロレタリア劇的側面と同等の比重を Jane Jem Readley の三角関係に置き、あわせて両者を演劇的想像力 = 言語でもってフュージョンさせること。

問題はこれによって何が失われ、また獲得できたか、である。例えば原作最大の感動的山場 (Mr. Carson の口からやっと “Forgive us our trespass” の言葉がこぼれ出る、和解の場面) は消えたか、と思いきや 終幕、娘のジェムへの ‘Forgive me’ により代替、天晴れ劇作家はおとし前をつけていた。他方、プーシコー脚本が原作小説の科白回しをそのまま踏襲 (地の文章は台詞化) した箇所は、例外なく ‘三角関係’ に関わる場面である ジェムとハリーの衝突 (I-ii 15章)、求婚したジェムが振られる下り (I-iii 11章)、ジェインの法廷証言 (IV-iii)、劇作家プーシコーが原作のどこに目を輝かせたか。その一つが不安定に揺らぐ娘心を描きとめた、女流ならではの微妙な筆致、であったことは保証できる。ただし並の三角関係では芸がないから、ジェムゆえに (For his sake) 凶器を預け潔く去ってゆくジョニー、の挿話を添えること。水夫の台詞「置き土産はぼくのハートと少しの恨み」(II-i) は絶品だ。

さらに戯曲構成上特筆すべきは、娘と工場主の逢引きを、父ノアに引金を引かせる直接の動機として仕立て直したこと。おそらく劇作家は (プーシコーは原作を实によく読み込んでいる) ここでは削られたエスターの影をだぶらせつつ、娘ジェインの、父親と労働者階級への ‘裏切り’ という要素を強調したかった。そのためには ‘敵’ を匿い、漏れた情報が強請のタネに、というメロドラマお得意の筋立て、それを実現可能にした新案舞台装置……お陰で ‘父娘もの’ として社会派劇と恋物語が、原作以上にがっちりと組み合わせられることとなった。

が、ことは新しい筋立てだけの話ではない。劇作家の卓抜な言語感性は、団交場面 (I-i) 直後に恋仇衝突の場 (I-ii) をブツケル。そして同じ幾つかのキーワード、‘brother’ (同志 / 「兄妹でいよう」)、‘right’ (権利 / 正義 / 右)、‘heart’、‘for someone’s sake’ を両者に跨るものとして演劇空間に響かせる、というモダンな言語手法を編み出した。着想の原点は小説原文であれ、実にオリジナル

紙幅の制約上、やむを得ず以下 (含文献) は次号に。